



TITLE:

日本語アクセント史の再検討：文献資料と方言調査にもとづいて(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

平子, 達也

CITATION:

平子, 達也. 日本語アクセント史の再検討：文献資料と方言調査にもとづいて. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18719>

RIGHT:

許諾条件により本文は2016/01/01に公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	平子 達也
論文題目	日本語アクセント史の再検討：文献資料と方言調査にもとづいて		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>日本語アクセント史の研究は、方言調査にもとづく研究と文献資料にもとづく研究とが相俟って進展してきた。諸方言アクセントの記述的研究によって、本土諸方言アクセントの概要は明らかになっている一方、それら記述的研究によって得られたデータをもとにした歴史的研究も進んできている。現在では本土諸方言の祖語段階におけるアクセント体系の再建案が示されてもいる。しかしながら、各方言アクセントの成立過程については未だ不明な点が多い。また従来定説もしくは通説として認められていながらその根拠が十分に示されておらず、種々の方面から批判の対象となっているものもある。本論文は、論者自身の臨地調査によって得られた方言アクセントのデータと文献資料調査にもとづいて、アクセント史の研究において残されてきた諸問題を再検討し、論者なりの見解を示したものである。</p> <p>導入にあたる第1章に続き、第2章では第3章以降における議論の準備として、日本語アクセントの記述的研究および歴史的研究で用いられる重要な概念や用語法などを説明する。論文の主要部分は「東京式アクセント」の成立過程に関して論じる第3章と、文献資料を用いた平安時代京都方言のアクセントに関する研究である第4・5章、外輪式アクセントについて扱う第6・7章に分けられる。第8章は本論文全体のまとめと本論文で扱えなかったいくつかの問題について今後の研究方針を述べる。</p> <p>まず、第3章では、能登島諸方言のアクセントを扱う。1930年代に服部四郎により日本語の方言のアクセントの概要が明らかにされて以来、「東京式アクセント」と京都方言を代表とする「京阪式アクセント」は、日本列島を広く覆う二大方言アクセントとして、歴史的関係が様々な観点から研究されてきた。1950年代になって金田一春彦は、「東京式アクセント」は「京阪式アクセント」から分岐・成立したとする説を発表し広く認められることになった。しかし東京式が京阪式を取り巻くという地理的分布の観点から、東京式が古いとして金田一の主張に真っ向から対立する研究者がいる。また金田一が想定したアクセント変化に対して、言語学の類型論的・音声学的な面からその変化が「不自然」で蓋然性が低いとする研究者もいる。第3章では、「東京式アクセント」の先史に金田一が想定している、「音調の山の後退」や「語頭隆起」など種々の変化が実際に起こりうる変化であるということを、石川県能登島諸方言アクセントの先史を再建することによって明らかにした。</p> <p>第4章では、文献資料を用いたアクセント史研究の中でも多くの蓄積がある平安時代の京都方言アクセントについて考察する。これはある程度具体的に往時のアクセントが分かる最古のもので、祖体系に想定される類の区別をほぼ全て保っているという点や、資料が成立した年代の絶対的な古さもあって、日本語アクセント祖体系の比較再建において重要な役割を果たしてきた。しかしこのアクセントについては、未だに音韻論的解釈について意見の一致を見えない部分が残されている。第4章では、平安</p>			

時代語アクセントの資料として用いられる声点資料の概要を示した上で、この方言のより妥当な音韻論的解釈をめざし、先行研究で共時的・通時的位置付けが問題となってきた拍内下降調とピッチの上がり目に関する問題について考察する。

従来拍内下降調を示す平声軽点が用いられないとされてきた観智院本類聚名義抄において、論者は下降調として再建されるものに差されている声点のうち、平声点位置に見られるものを、下降調を示す平声軽点の「粗雑な写し」であることを示した。また下降調として再建される形容詞終止形接辞「シ」と、二拍名詞5類の第二音節に差される声点のあり方が異なることから、同じ下降調と再建されるものにも差異があることを明らかにした。その上でこの二つの下降調の存在を前提にして、下降調の史的位位置付けに関する論者の考えを述べる。結論として、平安時代語アクセントの下降調は下げ核の反映として音韻化される中間段階にあるものであるとする。

第5章ではピッチの上がり目について、動詞活用形のアクセントと複合語アクセント規則という形態音韻論的な観点から、共時的な位置づけについて考察する。ピッチの上がり目をめぐっては、それが低起上昇式の語声調によるものなのか、それとも昇り核によるものなのかが問題とされてきた。論者は動詞活用形のアクセントからは、積極的に低起上昇式の語声調を持つ動詞語幹があったとする根拠はなく、結論として高起式と低起式の二つの語声調のみの対立があったとする。一方、複合名詞アクセント規則からは、低起上昇式の語声調が平安時代語の名詞アクセント体系の中に存在したことが示唆され、平安時代語の名詞アクセントにおいては高起・低起の二つの語声調に加え、低起上昇式の語声調も存在したとする。結局、平安時代語アクセントにおいては語声調の対立数が、動詞と名詞とで異なっていたことになるが、これは品詞間に見られる音韻特徴の差異として類型論的に見てもありうることであることも指摘する。

第6章では、出雲地方大社方言のアクセントを取り上げる。従来「東京式アクセント」として一括して扱われる諸方言は類別体系の観点から、内輪・中輪・外輪式の三つに分類される。このうち外輪式アクセントの類別体系は、内輪・中輪式と大きく異なるだけでなく「京阪式アクセント」と比較してもかなり異質である。従来、各地の外輪式アクセントの成立過程についての十分な検討もされないまま、平安時代京都方言のアクセントが変化して、外輪式アクセントが生じたものとされてきた。その際、外輪式の代表例として大分方言と青森方言だけが取り上げられてきた。確かにこれらの外輪式アクセントは、平安時代京都方言アクセントから分岐・成立したとしても説明可能である。しかし外輪式アクセントは、北東北・九州北部地域の他、出雲地域および愛知県東部から静岡県西部かけての地域にも散在しているのである。それにも拘わらず、一部の方言を除けば一拍・二拍名詞における類の統合のあり方以外の類別体系は必ずしも明らかになっていない。そこで論者は全体像が明らかではなかった大社方言における類別体系を示した上で、外輪式アクセントの成立過程に関する先行研究を批判的に再検討する。それにより大分方言や青森方言など典型的な外輪式アクセントで見られるIII-6類と7類の統合を、III-1類と2類の統合と同じメカニズムで説明しようとする従来の説を否定し、外輪式アクセントとは本来III-1類とIII-2類など平安時代語アクセントの高起式に対応する類を無核型に統合することで祖体系から分岐したものだとする。

る。これに対して各地の外輪式アクセントで観察されるIII-6類と7類の統合は、各方言においてそれぞれに独立して起こったものだと結論づけた。

第7章では、文献アクセント史上における一拍助詞アクセントの変化を扱い、その変化について興味深い指摘をしている。一拍助詞は平安時代語アクセントにおいて原則高平調で現れるが、その後は低く発音される拍の後に来る場合は低平調で現れるようになる。しかしこの「助詞の低下」は一律ではなく、二つの拍にまたがって下降が起きる場合より拍内下降を伴う場合の方が早く発生していることをつきとめた。このことは、どちらのピッチの下がり目も同一に扱い、その消失を外輪式のアクセント成立の背景に考える従来のシナリオが正しくないことを示唆するとする。そして二種類の「助詞の低下」と「ピッチの下り目」の消失とを関連付けて、平安時代語アクセントが本土諸方言アクセントの直接の祖体系とは考えられないとする。

第8章では各章の内容をまとめ、今後アクセント史研究を進める上でどのような問題が残されているかを簡単に論じ将来の研究への展望としている。論者に依れば、それらは「シーソー型ピッチ変化」に関わる問題、悉曇学関係資料における四声の記述の解釈、アクセント語類の認定に関わる問題である。

(論文審査の結果の要旨)

日本語は歴史的な背景から豊かな地域の変種を持ち、この変種すなわち方言について世界でも類を見ないほど濃密な研究が行われてきている。そのなかでもアクセントは最もよく研究されている研究課題であり、各方言のアクセント体系の記述、それらの体系の歴史的変遷や祖体系の再建、そして文献に残された京都方言の過去のアクセント体系の復元が主要なテーマである。最後のテーマは主に国語学者によって行われてきているのに対して、残りの二つは国語学・言語学の二つの分野にまたがる共通のテーマである。論者の平子氏は言語学の分野から日本語のアクセント史を研究する者だが、本学の国語学の薫陶も受けており、文献資料の分析によるアクセント研究をもこなす希有な研究者である。そして提出された論文は、アクセント研究にかかわる主要な3テーマのすべてを盛り込んでいる点で、非常にユニークかつ野心的であり、まずはその点を高く評価したい。

論文は全体で8章から成り立っているが、最初の2章は研究史と分析の方法を述べる序章であり、8章は全体のまとめである。能登島のアクセントを扱った3章、声点資料を用いて平安時代の京都アクセントを扱った4章、そしていわゆる外輪式アクセントをもつとされる出雲地方の大社方言を扱った6章が論文の本体となる。5章と7章はそれぞれ4章と6章で扱いきれなかった問題を論じた一種の補遺である。

本論文の中でもっとも注目すべき成果は、能登半島の七尾湾に浮かぶ能登島で話されている方言に関するものである。日本語のアクセント研究が抱える難問のひとつは、低起式と高起式の区別のある京阪式のアクセントと、式の対立がない東京式のアクセントのどちらが古いかという新旧の問題と、一方から他方がどのように変化したのかその変化のプロセスに関する問題である。新旧に関しては、金田一春彦をはじめとする日本の研究者が京阪式から東京式に変化したとするのに対して、海外ではR. Ramseyそして近年ではE. de Boerなどが、方言周圏説なども援用しながらその逆の説を唱えてきた。これには声点資料に見られる声点の調値の解釈もからんでおり、実に深刻な対立であった。金田一は早くから能登、とりわけ能登島の方言に見られるアクセントが、京阪式のアクセントから東京式に変化する中間の段階を示している可能性を指摘していたにもかかわらず、de Boerはその能登島のアクセントをも逆向きの変化の中間段階と位置づけている。

de Boerの2010年に刊行された著書を書評した論者はこの問題に特別な関心を持ち、幾度となく能登島に赴きいくつかの集落のアクセントの精密な記述を行った。集落固有の方言アクセントを保持しているのは70代以上の老人たちだけであり、日本の多くの方言同様この島の方言もまさに危機に瀕している。その精確かつ広範な記述は、やがて死に絶えるこの方言のきわめて貴重なドキュメンテーションになることは言を俟たない。論者は能登島において他の能登の方言同様に音調の山の後退が見られるだけでなく、いくつかの集落のアクセントの差異が新旧の違いであることと、そのうち低起式の語に関して、別所という集落ではほかの能登一般とは異なり語頭でピッチの緩やかな隆起が見られることを指摘した。さらに向田集落において、もとの低起式の語が、語頭拍が高く発音されるか、元来のピッチの下り目位置を保持しつつも、語全体のピッチパターンとしては高起式に対応する形式となって

いることを明らかにした．ここに低起式と高起式の二式の区別のある体系から，式の対立のない体系に移行するプロセスの一端が見て取れることを鮮やかに示すことができたのである．このようにして，京阪式から東京式に変化したことが実証された意義は極めて大きい．

4章と5章では，文献資料を用いたアクセント史研究の中でも多くの蓄積がある平安時代の京都方言アクセントを論じる．主に一つの拍内で下降が起きる現象が，声点によりどのように表記されているかを論じた．論者は，従来拍内下降調を示す平声軽点が用いられないとされてきた観智院本類聚名義抄において，下降調と再建されるものに差されている声点のうち，平声点位置に見られるものを，他の声点資料の声点の分布との比較により，下降調を示す平声軽点の「粗雑な写し」であることを示した．その上で下降調として再建される形容詞終止形接辞「シ」と，二拍名詞5類の第二音節に差される声点のあり方が異なることから，同じ下降調と再建されるものにも差異があることを明らかにした．それに続く5章では平安時代の京都方言におけるピッチの上がり目が，昇り核によるものか，低起上昇式の語声調によるものかを論じる．従来注目されなかった複合語に見られる式保存の原則を援用して，低起上昇式の語声調と解釈するほうが妥当であるという見通しを示している．なお4章は単行の論文として発表され，2013年度の日本語学会論文賞の対象になった．

6章では東京式アクセントのうち，最も周縁部で観察されるいわゆる外輪式アクセントの成立過程について論じる．従来は青森と大分のアクセントをもとに，平安時代京都アクセントの体系が下がり核を失うことによって成立したとする説が行われてきた．しかし論者が詳しく調査した大社方言の外輪式アクセントでは，低起式の3拍語においてそれらの方言とは全く異なる類別体系を示し，共通しているのは高起式において無核型になることだけであり，それこそが外輪式の特徴であると結論した．

このように本論文は3章を始めとして，アクセント史研究の進展に貢献するところが極めて大きい，問題がないわけではない．単行で発表された論文を改訂して取り込んでいる関係で記述が重複し，統一がとれていない部分が残っているのは惜しまれる．また文献に記録のない方言のアクセント変化を想定する際に，推定の上に推定を重ねるなどやや強引で説得力に欠けるところも見受けられる．しかしこれらは本論文を刊行する段階で改善されるであろう．

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる．なお，2015年2月20日，調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた．